

2015 年度 非文字資料研究センター・日本常民文化研究所・台湾大学文学院歴史学部 共催 第 1 回公開研究会

国際シンポジウム「帝国日本と台湾の眼差し—非文字資料の利用」の開催報告

日 時：2015 年 12 月 11 日（金） 10:00 ～ 16:00 12 日（土） 10:00 ～ 13:00

会 場：台湾大学文学院文 20 教室

報 告 者：常民研—高城玲、非文字—安田常雄、田島奈都子、金容範、金子展也

コメンテーター：内田青蔵（基調発言）、栗原純、大里浩秋、中島三千男、孫安石

報 告 者：呂紹理、蔡錦堂、許雅恵、王桜芬

コメンテーター：楊肅猷（基調発言）、周婉窈、陳翠蓮、李文良、陳慧宏、山内登文、顔杏如

孫安石（非文字資料研究センター 研究員）

2015 年 12 月 11 日～12 日、台湾大学文学院歴史学部と共催して国際シンポジウム「帝国日本と台湾の眼差し—非文字資料の利用」を開いた。そこでの報告やコメントの詳細な内容については、2016 年に別冊の報告集を制作することにしているので、ここでは、台湾側の 4 名の報告を取り上げ、その内容の一部を紹介することにしたい（全体のプログラムについては次ページの【表 1】を参照のこと）。

台湾大学歴史学部の呂紹理教授の「帝国日本と台湾の農薬広告」は、19 世紀後半からアジア地域に出現した「害虫」という概念がどのような経路で植民地台湾に伝播されたのか、を紹介するものであった。それによれば、1920 年代を前後した時期に日本の化学工業は飛躍的な発展を遂げ、農薬が本格的に農家に導入されるようになった、という。呂教授は、この台湾における農薬の伝播を裏付ける手掛かりを素木得一『台湾害虫駆除予防講習講義録』（1908 年）と三輪勇四郎『農業用殺虫剤要覧』（1939 年）を比較検討することに求めている。また、そのほかに『台湾日々新報』と『台湾農事報』の害虫に関連する新聞記事の分析は勿論、当時の日本の農薬製造会社を代表する会社であった「三共株式会社」の雑誌『三共新農薬』などの分析によって、1930 年代、40 年代の台湾における農薬が導入される詳細が明らかになる、と述べられた。

ところが、『台湾日々新報』の最も大きな広告主であった三共株式会社や「キンチョウ蚊取り線香」の製品で有名な「大日本除虫菊会社」はいずれも同新聞に農薬に関連する広告を積極的に掲載しておらず、その背景にはどのような理由があったのか、今後の課題であると指摘した。

台湾大学音楽学研究所に所属する王桜芬教授の「史料としての歴史録音—張福興勝利唱片の作品を例に」は、1930 年



写真 1 「シンポジウム会場」

代という植民地時代に台湾音楽の振興に尽力した音楽家の張福興が残したビクターレコードの作品を素材に、音楽または、音声資料をいかに歴史資料としてとらえることができるのか、を論じるものであった。王教授の紹介によれば、張福興は東京音楽学校を卒業した後、台湾に帰国して西洋音楽の受容と発展に大きな役割を果たし、台湾の「新音楽の父」として評価される人物である、という。彼は 1930 年代に台湾固有の音楽を保存し記録する作業に関わったほか、台湾独自の音楽を作ることを目指し、ビクターの台湾支部文芸部長として合計 11 曲のレコードを発行したが、その結果生まれたものは、「西洋」風味を加味した台湾音楽の再生産、という皮肉なものであった。

張福興は台湾音楽の振興を志す一方で、台湾音楽を軽蔑するという矛盾した心理状態に悩んだが、これは音楽に限らず、帝国日本と植民地にまたがった知識人が常に直面した問題でもあった。そして、彼の事例は、戦後 70 年という時間を経て現代社会を生きる我々にも共通する、アメリカや日本との関係、台湾というアイデンティティに悩む姿を映し出しているとも指摘した。

歴史学部所属の許雅恵副教授の報告「古鼎イメージの近代的転化：日中戦争（1937-1945）の中の大鼎」は、1937 年 12 月の日本軍の南京占領後、日本軍兵士を慰



写真2 「非文字資料研究センターの資料展示」

霊する目的で铸造された「大鼎」を取り上げ、慰霊というシンボルがどのように変容していったのかを検討するものであった。元々南京の戦いで亡くなった日本軍兵士を慰霊するために作られた「大鼎」は、後に靖国神社に奉納されたが、戦後には再び国民政府によって接収され、台湾に運び込まれた。そして、幾多の紆余曲折を経ながら、現在の台北の故宮博物院に安置されるに至り、「大鼎」に彫られた五弁桜は梅花の紋様に替えられ、制作の由来を記した銘文は、「博愛」という孫文の字に替えられた。古代中国で皇帝の権威を象徴する祭事の供物として制作されたとされる「鼎」は、古代と現代、南京と東京、台北という時空を超えて、新たなイメージを我々に提示しているのではないかと述べた。

台湾師範大学台湾史研究所の蔡錦堂教授の「戦後における台湾の神社の処分と研究」は、植民地時代に台湾で建立された数百を数える神社（官幣社、国幣社、県社、無格社のほか、各種の企業や学校に建立された構内神社を含む）の研究が、1980年代以降どのように行われてきたのかを、①修士・博士論文、②専門の論文集、③台湾総督府関連文書の翻訳と編纂作業、④各種機関の委託による神社の調査報告書の発行、という分野から検討を加えた上、戦後初期の行政長官公署と台湾省政府の公文書の中に、日本の神社を接収する過程を記した重要な内

容が含まれていることを紹介するものであった。そのうち後者については、戦後初期の1946年2月に台湾省行政長官公署の教育処は台湾神宮、台湾護国神社、建功神社の三か所をそれぞれ省立社教巡回施教団、省立台北民衆教育館、民衆学校として利用する計画であったこと、また、台湾護国神社は台湾省忠烈祠に、台湾県神社は中山公園に変更することを指示する具体的な規定も確認できるとした。蔡教授によれば、1980年代の半ばから始まった台湾の本土化運動により、旧来はもっぱら「侵略」の象徴であることを意味した神社に関連する文物が、いまは歴史的な建築や文化遺産として再評価されることになり、神社にかけられた「侵略国恥」や「皇民化」といった汚名をぬぐい、歴史遺産として再生するチャンスが与えられるようになったとのことである。

以上、台湾側の報告を四つ取り上げ、その内容の一部を紹介したが、報告者4名のほかに、台湾大学歴史学部所属する周婉窈教授、陳翠蓮教授、顔杏如教授、李文良教授、陳慧宏教授、人類学部の童元教授、音楽学研究所の山内登文教授がコメンテーターとして登場して、日本側の報告に対して刺激に富む活発な意見を提示してくれたことを付け加えておきたい。



写真3 「シンポジウム会場」

【表1】「帝国日本と台湾の眼差し—非文字資料の利用」のプログラム

12月11日 セッション1「帝国日本と非文字資料」(司会：孫安石)

- (1)「台湾『パイワン族の探訪記録』(1937)の現地上映会—現代に生きるアチックフィルム・写真」(高城玲-神奈川大学教授・日本常民文化研究所所員)
- (2)「戦時中の紙芝居と宣伝—日本と台湾の場合」(安田常雄-神奈川大学特任教授・非文字資料研究センター研究員)
- (3)「戦前期日本のヴィジュアル・デザインにおける台湾イメージ」(田島奈都子-東京都青梅市立美術館学芸員・神奈川大学非文字資料研究センター研究協力者)
- (4)「帝国日本と台湾の農業広告」(呂紹理-台湾大学歴史学部教授)
- (5)「史料としての歴史録音：張福興勝利唱片の作品を例に」(王桜芬-台湾大学音楽学研究所教授)
- (6)「古鼎イメージの近代的転化：日中戦争(1937-1945)の中の大鼎」(許雅惠-台湾大学歴史学部副教授)

12月12日 セッション2「帝国日本と台湾のイメージ」(司会：呂紹理)

- (1)「韓半島における日本人居留地と住居建築」(金容範-神奈川大学非文字資料研究センター客員研究員)
- (2)「メガ産業と企業神社—台湾における神社創立を全体としてとらえるために」(金子展也-神奈川大学非文字資料研究センター研究協力者)
- (3)「戦後における台湾の神社の処分と研究」(蔡錦堂-台湾師範大学台湾史研究所教授)